宮沢賢治の童話

坂元兌子

(一)

宮沢賢治といえば、〝雨ニモマケズ、風ニモマケズ〟の詩がこだまのように思い浮かぶことでしょう。彼は謙虚で、素朴で、土くさい人として知られていますが、実は、楽しい子ども向きの童話を数多くつくっています。楽しさを子どもに与える上に、読後に、生命の充実感を残すものがあります。

おとなが童話を子どもに与えるとき、いろいろの注文をつけてしまいます。一般的にいって、たとえば民族の伝統の伝達とか、正しく生きる道をさとらせるとか、未知の世界に触れさせるとか、情操を豊かにすることなどあげられます。これらを子どもがひとりでに感じとるのが理想なのでしょうが、おとなが子どもに与えることになるため、そして、対象となる読者があまりにもおさなく、つかむ力が乏しいためか、どこかに不満のある童話が多いように思われます。教育的にすぎるか、道徳的にすましているか、子どもにこびているかなどといった、ものたりなさです。子どもたちがお話の世界に自分の夢や生活を見出して同一化してしまうことに童話の楽しさがあるのでしょう。しかし、子どもが成長して、おとなになっても、なつかしく感じ、思い出しても感動に胸がたかまるような童話が未来のある子どもを育てていくのではないでしょうか。そのような条件にかなうものとして、賢治の童話はすぐれた童話であると思われます。

(二)

宮沢賢治の童話は「セロひきのゴーシュ」「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」「グスコーブドリの伝記」「貝の火」「なめとこ山の熊」などよく知られておりますが、全部で約八十篇ほどあります。彼の生前に出版された唯一の童話集「注文の多い料理店」の序文に、彼の創作態度をいちばんはっきりみることができると思います。そのこ

とば、文章、貫ぬかれている精神は、いくど読みかえしてみてもあきないくらい、美しいのです。まるで、光りきらめくガラスのつゆなのです。

〝わたくしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。またわたくしたちは、はたけや森の中でひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものにかわっているのをたびたび見ました。……これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。……わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。〟

静かな祈りにもたとえられる文面から、賢治の信念がひたひたとつたわってくるように思われます。美しいファンタジの世界へのあこがれがわいてきます。

賢治のこの童話集には、「どんぐりと山猫」「月夜のでんしんばしら」「注文の多い料理店」「鹿踊りのはじまり」など九篇の童話があります。これらを読むだけでも、賢治の特色はよくわかります。

「どんぐりと山猫」では、おかしなハガキがまいこんで一郎は山にいきます。一郎は山猫の裁判長にたのまれて三日もつづいたやかましい〝どんぐりのえらいものは？〟というけんかを一ぺんでおさめてしまうのです。山猫はいばってばかりいましたが、とても喜んでお礼をくれるといいます。

〝「そこで、今日のお礼ですが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭の頭でなくて、まあよかったと感じてほっとしました。〟

ここまで読むと、子どもたちは、やっぱり山猫もお家のねこと同じだなと喜ぶでしょう。賢治は幻想の中におぼれているように見えながら、子どもの心の動きをよく見抜いているのです。と同時に、よく読みかえすと、鮭の頭・メッキのどんぐり・山猫に象徴的なものが含まれています。何とも言えない深い皮肉(アイロニィ)さえ、感じるのです。

子どもというものは、おとなの世界の弱さをえぐった風刺小説をそれと意識せずに自分たちのものとして親しむ場合がよくみられます。

一風かわった童話ですが「注文の多い料理店」は気どった都会人を批判したものです。イギリスの兵隊のかたちをした二人の紳士は、森のなかへ鳥やけものを射ちにきますが、あまり山の奥へ入りすぎて方角を失ってしまいます。そこに西洋料理店とかいた立派な料理店が見つかって、大いに喜びます。しかし、注文を書いたとびらの中にまたとびらがあり、進んでいくうちにまる裸にされてしま

います。結局、来た人を西洋料理にして食べる家だったのです。この外にも、「クねずみ」「ツエねずみ」などの知識をひけらかす人も典型化されて登場しています。

これらからわかるように、賢治の童話はひとにこびる単なる甘さではなく、人生に当面する真剣な態度につらぬかれています。あまりにも真剣な目になると、むつかしくて、童話の領域をはみだしてしまうようなものもあります。独特のファンタジは、賢治の信念の飛び散ったものであり、彼の理想の具体化と考えていくこともできましょう。

(三)

賢治の童話のうちで、童話として最も整っており、作者の気持と作品が、スムーズにむすばれていると思うのは「よたかの星」「オッペルと象」「貝の火」「ふたごの星」などです。

「よたかの星」のよたかはやさしい鳥なのですが、顔かたちがみにくくて、みんなのきらわれものです。たかは、自分の名前とまちがわれるのを怒って、名まえをかえなくては殺してしまうと言います。よたかは、殺されることのつらさを身にしみて感じ、はじめて自分が毎日、何百となく虫を食べていることに気がつきます。みにくいからといって、いじめるみんなをうらむより、むしろ、自分は、何のあわれみの心もなく、虫をたくさん殺してきたことに気がつくのです。いい知れぬ悲しさ、これは、よたかだけでなく、生きとし生けるものすべてのものが感じる生のあわれさでしょう。よたかは、生命あるものの悲しさからのがれようと不変な星や月にあこがれます。そして、夜空に光りかがやく星に向かってとびつづけ、しまいに、からだから火をふきだして、星になるのです。

よたかの悲しみが、子どもたちに、完全に理解されるとは思いません。普通の童話では、よたかをいじめる他の動物たちを悪ものとして憎み、しだいに、または、何かの事件をおこさせて反省させるという形をとることでしょう。賢治の場合、あたたかい心をもてない鳥たちに非難の目をむけないで、もっと深い哲学的な見方をしています。生きるもののはかなさ、生命の尊さ、不変なるものの幸福などへの感動が私たちをとらえるのです。

「オッペルと象」の白象は、仕事を遊びとまちがえているのじゃないかと思うほどのんびりと楽しく働いていました。しかし、主人のオッペルは白象にくさりをつけたり、えさのワラたばの数を日に日にへらし、仕事は山のように与えます。しかし白象は主人のオッペルを憎んだりせず、毎夜、月に向かって、「サンタマリア」とよびかけるだけでした。月があわれんで、森の仲間に知らせ、象の大群がオッペルをおそい白象は助けだされたのです。しかし、その時、白象は〝ありがとう〟とさびしく笑ったのです。この白象の心をもつ賢治の心は、こわくなるほど、読者の心をゆすぶります。

(四)

純粋な魂と美しい愛情は、賢治の童話の大きな主調となります。「ふたごの星」をみましょう。水晶のお城にすむ、チュンセとポーセのものがたりです。星めぐりの笛を吹く役目の二人はお昼、泉に遊びにきていますと、大がらすとさそりが、いばりながら水を飲みにきます。そこで、けんかをして、さそりは大がらすのくちばしでさされ、大がらすはさそりの毒で、死にそうになります。チュンセとポーセは、心をこめて二匹を生きかえらせ、星めぐりのできるようつくすのです。ひかえめで、何も欲求しない勇敢な態度です。

人間や生きもののはかなさや弱さを意識せざるを得ない賢治なのですが、それが少しもセンチメンタルなあきらめやなげきになっていないのです。いや、一層、美しいもの、自然なもの、素朴なものを愛し、尊んでいくのです。彼の童話は、精神的に高度な、理解しつくせないムードをかもし出しています。特に単純、明解であるべき童話にとって、難しすぎると考えられがちですが、そうでもないのです。根本的には常に一つのことなのです。

幼児には表面しかわからなくとも、その擬人化された構成で、何かを感じとれるでしょう。小学生、中学生ともなれば、真実についての洞察力を持って、賢治の悲しさ、と希望と喜びを胸に感じとることができましょう。賢治の希望と喜びというのは、生命の悲哀を通りこえて、すべてのものが同胞となってくらせる世界の実現をめざすことだと思われます。先にあげた「どんぐりと山猫」の一部がどんぐりに〝だれが一番えらいか〟という問に対する答えは、〝いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなってなくて、あたまのつぶれたようなやつがいちばんえらいのだ〟というのです。

また、「気のいい火山弾」のべご石「虔十と公園林」の虔十などの対社会的におとっているものが決して、価値のないものではないことを暗示しています。社会的評価をそのまま受け取ってしまいがちな現代では、ずれた感じがしなくもありませんが、それだからこそ、子どもたちにこのおはなしを知ってもらいたいものです。リズミカルで、親しみやすい表現ですし、子どもたちも何かを感じるでしょう。おとなが一しょになって感動し楽しめるのですから、読んできかせてあげたいと思います。

(五)

私は児童文学に頭をつっこんでいるうちに、賢治の童話をつらぬいている愛にぶっつかりました。それは、やはり、一つの宗教的な信仰心でしょう。説教するのでなく、信仰と創作とが一つになっているのです。美しく、力強い明るさとユーモアを通して、愛の目を子どもたちにそそいでいます。

フランスの作家、ポール・セザールが理想の児童文学について〝わたくしは芸術の本質に忠実である本を愛する〟と述べています。私は、心から共感します。賢治の童話のおもしろさ、感動させる点、それは、つまり芸術であるということだと思います。

（「いそぎんちゃく」同人）